



# A Discourse Analysis of Malaysian English Media Texts on Muslim Gender Issues

著者	スラストゥリ ビンティ ヤハヤ
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	153
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/56700">http://hdl.handle.net/10097/56700</a>

スラストゥリ ビンティ ヤハヤ  
SULASTRI BINTI YAHYA

学 位 の 種 類	博 士 (国際文化)
学 位 記 番 号	国博 第 1 5 3 号
学位授与年月日	平成 2 5 年 9 月 2 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院国際文化研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 国際文化交流論専攻
学 位 論 文 題 目	A Discourse Analysis of Malaysian English Media Texts on Muslim Gender Issues (マレーシアの英語メディアテキストにおけるイスラム教徒のジェンダー問題の談話分析)
論 文 審 査 委 員	(主査) 准教授 ナロック ハイコ 教 授 小 野 尚 之 准教授 中 本 武 志 准教授 澤 江 史 子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 1. はじめに

本研究はマレーシアにおけるイスラム教徒の女性についての表現がメディアにおいてどのように構築されているのかを分析することを目的とする。批判的談話分析 (Critical Discourse Analysis: CDA) (Fairclough, 2003) 及びフェミニストポスト構造主義 (Feminist Poststructuralist Discourse Analysis: FPDA) (Baxter, 2003) を組み合わせて用いることで、マレーシアのイスラム教徒女性の位置づけを探る。マレーシアにおける主流な新聞である *The Star* 及び *The New Straits Times* から抽出したコラム記事を使用する。本研究では、コラム記事の分析を通して様々な筆者により構築されるディスコースで既存のものと対立しているものを検証する。また、マレーシアのイスラム教徒女性のアイデンティティ及び表現を構築・議論するためにどのような言語が用いられているのかも分析する。

CDA 及び FPDA を用いることで執筆者自身及び他のイスラム教徒女性がどのように位置づけられているか、また優勢的なディスコースと代替的なものをどのように活用しているかについても考察する。

## 2. 研究の背景と目的

穏健でありながら進歩的なイスラム国家であるマレーシアはイスラム教徒と非イスラム教徒に対して異なった法律を施行しているが、それに伴い女性の権利に違いがみられる (Anwar, 2001)。Embong (2001) によると、マレーシアはマレー系、中華系、インド系の子孫たちによる安定した多文化社会であるが、マレーシアには必ずしも危機がないとは言いきれず、危機は宗教が関係すると顕著になる。マレーシアのイスラム教徒の女性はしばしば性別による不公平の対象になってきた (Anwar, 2001)。マレーシアのイスラム女性教徒の団体からなる Sisters in Islam (SIS) と呼ばれる集団は近年この問題に対して、マレーシアでイスラム教徒のフェミニストイデオロギーを打ち立てることにより対応しようとしている。

この研究において、マレーシアの二人のフェミニスト女性記者 Marina Mahathir (MM) と Zainah Anwar (ZA) のコラム記事を分析する。この二人の記者は SIS の著名なメンバーでもある。彼女たちのコラム記事(メディアテキスト)は *The Star* と *New Straits Times* というマレーシアにおける二つの主要英字新聞に掲載されている。*The Star* はマレーシアにおいて最大の発行部数を誇る英字新聞であり、*New Straits Times* の発行部数はそれに次いでいる。

この論文はマレーシアのイスラム教徒の女性の権限剥奪に対する異議申し立てに関する問題に焦点をあてる。談話分析のアプローチを用い、マレーシアのイスラム教徒のフェミニスト作家たちが、マレーシアにおいて長期間歴史的に「良識ある」と考えられてきた有力に宗教的かつ性差に基づく談話に対し、どのように異議を唱えているか説明する。この研究ではこれらのフェミニスト作家たちが、イスラム教徒の女性がより望ましい条件を得ることができるよう権限を付与すべく、どのように抑圧的かつ差別的な談話に対抗すべく非伝統的な談話を構築しているかを示す。新聞のコラム記事を分析するために談話分析の手法を用いるのは、現在起きている社会変化をありのままに描写するためである。

### 2.2 研究課題:

- 1) メディアテキストにおいて、性差とマレーシアのイスラム原理主義者による談話はいかに脱構築されているか。
- 2) メディアテキストの文脈において、マレーシアの(分離主義的な)イスラム法(Syariah 法)体系はいかに異議申し立てがなされているか。
- 3) (メディアテキストにみられるように) マレーシアのイスラム的な文脈内においてフェミニストの課題はいかに追及されているか。

### 3. 理論的枠組み

データの分析には CDA と FPDA の多面的な視点のアプローチを用いた。批判的談話分析(CDA)は研究者が社会的政治的文脈における文章と発言を分析し、社会的権力、支配、不平等が一般大衆の言論においていかに表現されているかを観察するアプローチである (Van Dijk, 2001)。CDA の目的は言語の用いられ方と社会習慣の関連を探究することである (Phillips & Jorgensen, 2002: 69)。フェミニスト・ポスト構造主義的談話分析(FPDA)は多様な談話を観察し、いかに人々が「談話によって形作られた世界において、自らのアイデンティティー、関係性、社会的地位と折り合いをつけるか」を考察する (Baxter 2003)。CDA と FPDA はマイクロ言語分析とマクロ言語分析を用い、人々が会話、行動、相互影響において談話的に行うことを分析する (Kamada, 2010: 19; Baxter, 2010: 131)。

Fairclough によれば、CDA の三つの側面は記述、解釈、及び説明である (Fairclough, 1989: 26)。記述とはテキストの形式的な特性を指す。テキストの分析は語彙と意味論、文法、音韻論と記述法といった伝統的な言語解析の手法を含む。またテキストの分析はテキストの構成、結合、全体の構成も含む。

解釈とはテキストと相互作用の関係を観察することである。談話上の習慣とはテキスト上の習慣と社会文化的習慣の仲介を受け持つ。これには談話上の習慣の視点から見た複数のテキスト間のテキスト解析も含まれる。解釈の目的はテキストから利用できる数多い類型と談話を説明、描写することである。テキスト間の分析は言語学的分析によって実証され、社会的かつ文化的な習慣の理解にも依っている。

最後の側面は社会文化的慣習である。相互作用と社会的な文脈間の関係こそが説明の段階にあたる。これは社会文化的な文脈をより大きな構図から観察することにより、伝達する事象がより深く理解されるようになる。

FPDA は明示的な意味と暗示的な意味という二つのレベルの分析を行う (Baxter, 2003:75)明示的な分析は、その分析がテキスト内において何が起きているのか記述を観察するという点において、CDA の記述段階におけるテキスト分析に類似している。CDA における第二の側面の解釈段階における談話習慣のように、FPDA の暗示的な分析は解釈的な社会的談話を探究する。暗示的な段階における分析はどのように人々が権力のある地位を求めて、もしくは権力のない地位を避けようとして交渉するかについても考察する。

#### 3.1 方法論的な枠組み

マイクロ分析とマクロ分析を伴う CDA と FPDA の枠組みを用いた。マイクロ分析には CDA のテキスト分析と FPDA の明示的分析を採用する。双方の分析法を用いてテキストの特性と記述に着目する。マイクロ分析において、テキストの言語学的な特徴を検討し、特に語彙の選択と文法に焦点を当てた。テキスト分析は人々が言語を用いて何を「する」か、言語を通じてどのようにさまざまな行動を「する」かの検討も含まれる。

マクロ分析はレベルの異なる解析法であるが、この場合 CDA の解釈段階における談話と社会文化

的な習慣の組み合わせ、および FPDA の暗示的な分析を基にしている。マクロ分析においては、いかに人々が自分自身と他者をイデオロギー的な視点において「位置づける」か、支配的な談話と非伝統的な談話が使われる社会的な談話において、人々がそれをいかに用いるかを探求する。会話の相互作用における談話をいかに探求するかという Kamada(2010)の解析法を援用し、談話の出現と、いかに人々が自分自身と他者を位置づけているかを発見するため、テキスト内で「繰り返し用いられる単語、共通して現れるテーマ、関連と矛盾」(2010: 25)を探す。

CDA と FPDA の枠組みを組み合わせ、この研究では以下の方法論的な枠組みに基づく課題を用いた。

- 1) 二人の女性イスラム教徒のフェミニスト記者が自分のコラム記事においてどのような談話行為や言語学的な特徴を用いているか。
- 2) 二人の記者が自分の記事においていかに自らと他者を位置づけているか。
- 3) (二人の記者によって書かれた)主要紙のコラム記事においてどのように重要なジェンダーと宗教上の談話が記述されているか。

#### 4. 分析と結果

以下の分析は方法論的な枠組みに基づいて、3つの研究課題に答えるべく行われる。言語学的な特徴に着目し、MM と ZA のテキストにおいて用いられた談話行為を検討した。またコラム記事における二人の記者の自らと他者の位置づけを探求した。最後に彼らのコラム記事に現れる談話を確認した。

##### 4.1 マレーシアにおけるジェンダーとイスラム原理主義者の談話を脱構築する

研究課題の1に答えるため、マレーシアにおける性差、ジェンダーに基づく不平等、及びイスラム原理主義の談話をテーマとした MM と ZA のコラム記事を分析した。イスラム原理主義者による談話は、反現代的な基準を促進する「理想化された過去」に基づき、イスラム社会を再生する改革に言及している(Moghissi, 1999)。

MM と ZA 双方ともある種の行為を行い、また女性を差別する主体が男性であることの暗黙の言及を隠すため引用に当たり受動態を用いていた。こういったコラム記事において、社会的行為者はほとんどの場合一般的であるが、ZA はコラム記事によっては「マレーシア政府」、「イスラム主義者グループ」や特定の個人を社会的行為者としてはっきりと前面に提起している。MM も「政党」や「議会」を社会的行為者としてはっきり前面に提起している。両記者とも読者を個人的に引き込むべく、両記者と同じ信条や価値観を持つ人々に言及する際には「私たち」という包括する意味を持つ代名詞を用いている。

MM は多様な談話行為を通して、ジェンダーによる不平等の談話と「イスラム原理主義者の談話」を脱構築していることが観察された。なかでも、MM は性差別主義を強く非難し、「女性被害者を非難する談話」に疑いを抱き、男性による宗教上の取り決めに異を唱えていた。ZA の談話行為は性差をなくし、伝統的な性的役割を批判することへの促進を含んでいた。MM, ZA の両者とも言論の自由

の制限とイスラム教徒の女性に対する制限に異を唱えていた。また、家長的な態度を非難し、平等な雇用機会を得るべく女性に権限を与えるよう主張した。

地位の探求については、MM は女性を不公正、犯罪、暴力の犠牲者として、そして男性を犯罪や暴力の加害者として、また男性政治家を「悪癖」を持っており、信頼に欠け、究極の支配権を持っていると位置付けていることがわかった。ZA は女性を職場において軽んじられており、男性が家長として女性を支配していると位置付けていた。彼女たちの所属する団体 SIS を擁護するために、MM と ZA の両者の談話行為には適切な方法でイスラム教を信仰していないということで団体を批判し「非イスラム的」、現代的、リベラルと呼ばれた人々も含めている。ZA はイスラム原理主義者の追従者と信じられている SIS の批判家達を、権威主義者であると位置付け、両記者とも彼らをイスラム過激派と位置づけていた。

MM と ZA は、権力を持っている男性を支配的であり女性の地位に対して責任があると非難し、「女性と男性は平等である」という談話を促進していた。ZA は経済活動への参加において女性はもっと積極的役割を果たすよう権限の委譲を促し、MM は政府において高い役職を得るよう提唱していた。また、イスラム原理主義を信望する人々に対抗し「進歩的なイスラム教」の談話を提唱していた。両者ともイスラム原理主義の談話を現代の生活には不適切であると脱構築していた。

#### 4.2 (分離して施行される)イスラム法または Syariah 法に対する異議申し立て

MM と ZA のイスラム法もしくは Syariah 法、特にイスラム家族法 (IFL) を中心的なテーマとしたコラム記事を分析し、研究課題 2 に対して回答した。

MM と ZA の両者はイスラム法の改正に責任のある主体として「政府」、「議会」、内閣をはっきりと表している。両記者は家族法に関してマレーシアのイスラム教女性と非イスラム教女性の 2 グループを比較した。しかしながらある引用では、両記者は受動態を用いるか、動詞を名詞に変化させる名詞化を行っている場合があった。「否認」という語により早婚を認める主体を、子どもとして過ごす時期及び教育を否定する主体として定められていなかったとして、このバックグラウンドを述べた際に、ZA は名詞化を用いた。MM による名詞化の使用は宗教を解釈した主体について言及されていないときに見られた。他の文脈、分野、談話を用いる間テキスト性は、MM と ZA によって用いられるもう一つの言語学的特徴である。MM は他のイスラム国家の家族法の間テキスト性の引用や用例を用いている。両記者とも南アフリカ共和国の「アパルトヘイト」を間テキスト性として参照し、イスラム教徒と非イスラム教徒に対する 2 重の法体系について記述し、イスラム教徒の女性に対する差別であると主張した。

マレーシアにおいて分離して施行されるイスラム法に異議申し立てをする際、MM と ZA は IFL が差別的、不平等、不当であるという異議を申し立てる談話行為を行っていた。両作家はイスラム教を日常生活に適用するため、イスラム教經典の現代的解釈を論議していることが見受けられた。MM の談話行為はイスラム教家族法 (IFL) の信ぴょう性について異議を唱え、他国の家族法を称賛するまでにまでに進展した。「真正な」イスラム教の施行を非難し、イスラム教の悪用や不正操作であると異

議申し立てをするという同様の談話行為は、ZA も示していることが見受けられる。ZA による他の行為として、IFL の改革と全国民に対する同権利の付与を提案している。

位置づけについて述べれば、MM はマレーシアにおいてある種のイスラム教徒の男性をうぬぼれ者であり、イスラム教徒の女性を退化させている、と位置付けている。対照的に、MM はある特定の男性を女性の支持者であり、マレーシアの非イスラム教徒の女性を進歩的であると位置付けている。彼女はまた NGO を不当な法律に対する抗議団体と位置付けている。ZA はマレーシアのイスラム教徒の女性を宗教的なアパルトヘイトの犠牲者であると位置付けている。

イスラムの慣習に属しているため、「イスラム流の家長制度」の談話はいまだに見られ、マレーシアを含むイスラム社会において非常に支配的である。イスラム流の家長制度とは一番高い地位に上り詰めたイスラム男性がほとんどすべての最終決定を下すことをさす。MM と ZA は現在に至るまでずっと男性の視点のみが考慮され、その結果女性は離婚や遺産相続などにおいて「不平等と不正義」を被ってきたという、宗教的テキストの解釈について異議申し立てを行った。両作家ともイスラム法における「平等と正義」の談話を促進してきた。イスラム教徒の女性が権限を剥奪された他の分野としては、他社会あるいは他信仰における女性と違って、不公平に扱われ不平等に差別されたことであり、データの中で明らかにとなっており「宗教的隔離」の談話として本研究では名付けることとする。

#### 4.3 マレーシアのイスラム教文脈内でのフェミニストの課題の追及

研究課題 3 に対応するため、有力なイスラム教国家であるマレーシア社会でフェミニストの課題を追及することにより、MM と ZA がどのようにマレーシアのイスラム教徒の女性に対する性差別と Sisters in Islam (SIS) に対する非難に異議申し立てを行っているか解析する。

MM と ZA は SIS が社会的行為者であると強調し、ふたたび述べることになるが、グループの構成員と同様の信条を共有する読者を示すため、包括的な名詞である「私たち」を用いる。MM と ZA によるイスラム教徒の女性に対する他の言及としては自分以外のイスラム教徒の女性に権限を付与する社会的行為者を含む。社会的行為者としての一般もしくは個別の男性と女性が用いられることもあるが、引用に当たっては MM と ZA の双方とも男性と推測される行為者についてバックグラウンドを述べている。MM と ZA の両者は、ZA が急激な変化を示す大衆的な概念の「パラダイムシフト」というフレーズを使用し、MM が「異なる意見を持つ者は発言すべからず」と信じる他人の意見を引用することに観察されるように、間テキスト性を用いる。

MM のフェミニストの課題を追及する談話行為に見受けられることは、MM はイスラム過激派に異議申し立てをするものの、人権と宗教の関連性については称賛していることである。ZA の談話行為にはイスラム教の理解におけるパラダイムシフトを促進し、家長による解釈によるイスラム教徒の女性こそが理想的な人物であるという解釈の拒否が含まれていることがわかる。

位置づけに対する分析から判明することとして、MM は何人かの宗教学者を不公平であると位置付けている。一方、彼女は何人かの肯定的な主体性を持つ宗教的指導者を「人権の擁護者」として、何人かの女性宗教学者をイスラム教の知識があり論評するに値するとして位置付けていることがわかる。

また、SIS を女性のための平等と公平のために戦うグループとして位置付けている。ZA は SIS を批判する人々を「過激派」、ある種の「イスラム教の専門家」、権威主義者と位置付けていることがわかる。一方、彼女は SIS を過激派の「敵」と位置付けている。

MM と ZA は他者を奮起させ他者を自分達と同様の存在まで高める「新しいイスラム教の女性」という談話を構築した。彼女たちは、女性は無権力を持たないというジェンダーに基づく談話に異議を唱える「女性の団結」という談話を用いた。彼女らのコラム記事にはイスラム原理主義の談話に異議を唱える「進歩的イスラム教」という談話も見られた。SIS が非イスラム的であるという非難を論破するため ZA は、SIS の活動と「イスラム教徒の女性の談話」を採用する SIS の進歩的なイデオロギーを支持する何人かの著名な宗教学者を引き合いに出している。MM は、SIS はイスラム教の教義から逸脱してはいないと誓いつつ、イスラム教フェミニズムの談話を促進し、SIS はイスラム教の文脈の中でより進歩的な国家の建設を試みていることを示した。

#### 4.4 考察

MM と ZA は、原理主義者に常に賛同するとはかぎらない、平均的で現代的なイスラム教徒の新しい発言であると理解する。こういったコラム記事はただ思考することのみならず、ジェンダー的不平等に関して実際に行動をとるべきという選択肢と励ましを提供する。MM と ZA の双方とも女性に関するコラム記事を書き、同様な立場にある他の女性、もしくは法の下での不公正の犠牲者となっている女性を結びつけるため「女性の団結を説く談話」を用いる。ZA はマレーシアのイスラム教社会を、平等と公正の慣行を支持する可能性がある男性ばかりではなく進歩的な女性からも構成されると肯定的に再構築した。

マレーシアにおいて MM と ZA の記事に関して批判がないというわけではない。マレーシアのイスラム原理主義者の団体は SIS のイデオロギーを受け入れることに頑強な反対を示している。MM と ZA は常に自分自身と他の女性への批判と否定的なイデオロギーに異議を唱えていると見られている。他方、MM と ZA は彼女ら自身と他のイスラム教徒の女性を、自身のコラム記事を通じてイスラム教徒の女性の消極的立場を脱構築するための権限移譲の主体と位置付けている。MM と ZA は主流の宗教的また性差的な談話に異議を申し立て、「イスラム教フェミニズムの談話」や「平等と公正の談話」等の新しい談話を促進していると考えられている。

両記者はイスラム教徒のフェミニズムの談話を自身の著作を通じて促進し、自身のコラム記事において、自らに権限を与え人権を獲得する女性のモデルとして役立つように似通った談話を用いた。重要なことであるが、これはイスラム教の教義の外ではなく、逆にイスラム教の枠組みの中で、明らかに平等を促進するコーランの教えに基づいて成し遂げられるべきであるとしていることである。MM と ZA はイスラム教家族法の施行はイスラム教徒の女性に対してのみ差別的であり、非イスラム教徒の女性に影響を受けないため、マレーシアに「宗教的隔離政策の談話」が存在すると説いている。伝統的なイスラム教の規範に同意するのではなく、MM と ZA は教育を受けた、自立しており、かつ進歩的な今日のイスラム教女性の新しい主体を構築することにより、主流の談話である「イスラム教家



長制度」、「保守的な女性」に異議を申し立てた。一連の選択された抜粋を通して、MM と ZA の両者はイスラム教の価値観を無視することなく、改革者かつ革新者として現代イスラム教女性を再構築していると考えられた。

マレーシアにおけるイスラム教フェミニストの発言の興隆はマレーシア自身を「協調的なイスラム教」を施行する世俗国家として提示していることに由来するという Ong (1999: 365)の説に賛同しつつ、MM と ZA を通じた SIS の発言は大胆で進歩的なアプローチであると主張する。これはイスラム教徒の女性がマレーシア社会において自身のアイデンティティーについて協議し、進歩的なイスラム国家の発展に貢献できるようになったという点で重要な進展である。SIS に所属する女性はマレーシアを「ただ」のイスラム国家ではなく、国家アイデンティティーと規範を持つ「進歩的な」イスラム国家と捉えている。

## 5. 研究の意義

この研究では SIS に属する二人の記者の言語の使用方法を検討し、新聞のコラム記事から談話を分析した。メディアテキストをより大きな読者とコミュニケーションを図るための道具として使っていることがわかった。本研究が明らかにしたことは、社会的変化を現在進行しているありのままの姿で理解するにあたって、メディアテキストの談話分析方法論が関連する理論的アプローチをいかに提供するかということである。本研究は、従来の社会で変革に対して起こる抵抗を克服することにより、肯定的な社会変化及びイスラム教徒女性のアイデンティティーと地位が進歩するための貢献となるものである。

この研究は、いかにメディアがマレーシアのイスラム教徒フェミニストの談話の構築とインパクトに貢献できるかについて提唱した。メディア上のイスラム教徒のジェンダー問題の言語に関する談話分析を用いることにより、いかにアイデンティティー、関係性、位置づけが構築され、争われているかを明らかにした。この研究はメディアの表現を通して、マレーシアのイスラム教徒女性の権限獲得に注目を集めるのに果たしたメディアの役割の重要性をはっきりと示した。イスラム教徒のジェンダー問題に着目することにより、この研究はマレーシアのイスラム社会において現在進行中である社会変革を例証することとなった。

## 参考文献

- Anwar, Z. (2001). What Islam, Whose Islam?: Sisters in Islam and the struggle for women's rights. In R. W. Hefner, *Politics of multiculturalism: pluralism and citizenship in Malaysia, Singapore, and Indonesia* (pp. 227-252). USA: University of Hawaii Press.
- Baxter, J. (2010). Discourse-analytic approaches to text and talk. In L. Litosseliti (Ed.), *Research methods in linguistic* (pp. 117-137). London: Continuum.
- Baxter, J. (2003). *Positioning gender in discourse: A feminist methodology*. New York: Palgrave Macmillan.

- Fairclough, N. (2003). *Analysing discourse: Textual analysis for social research*. London: Routledge.
- Fairclough, N. (1989). *Language and power*. London & New York: Longman.
- Kamada, L. (2010). *Hybrid identities and adolescent girls: Being 'half' in Japan*. UK: Short Run Press Ltd.
- Moghissi, H. (1999). *Feminism and Islamic fundamentalism: the limits of postmodern analysis*. London & New York: Zed Books.
- Ong, A. (1999). Muslim Feminism. *Citizenship Studies*, 355-371.
- Phillips, L., & Jorgensen, M. W. (2002). *Discourse analysis as theory and method*. London, Thousand Oaks, New Delhi: Sage Publications.
- van Dijk, T. (2001). Critical Discourse Analysis. In D. Schiffrin, D. Tannen, & H. E. Hamilton (Eds.), *The handbook of discourse analysis* (pp. 352-371). Oxford: Blackwell Publishers.

## 論文審査の結果の要旨

ヤハヤさんの論文は、批判的談話分析（CDA）とフェミニスト（男女同権主義的）ポスト構造主義談話分析（FPDA）を用いて、マレーシアの自分達がどのようにイスラム教徒女性に対する社会的制約に対抗しながら自分達の立場を構築しているかを分析するものである。具体的な分析は、*Sisters in Islam* (SIS)というイスラム教的フェミニスト NGO に属する二人の女性活動家による新聞コラムに基づいて行っている。

論文は6章と付録からなる。第1章では、この研究の社会的背景と必要性を論じている。マレーシアは多民族・多文化社会であるが、イスラム教徒が多数を占めている。ところが、1980年代から中東のイスラム原理主義の影響が強まり、1984年と2005年に制定されたイスラム家族法がムスリム女性の権利を著しく制限した。SISは1980年代に形成され、政府に容認されながら大手新聞へのコラム執筆や国際会議参加などを通して、イスラム原理主義の政治的勢力に対抗しつつ、ムスリム女性の立場の改善を訴えている。本研究は、談話分析の方法論を用いて、具体的にどのような談話によってこうした運動を行っているかを明らかにしようとする。

第2章では、本論文の理論的・方法論的枠組みが紹介される。この論文は、談話分析によってメディア言語の分析を行おうとするが、その際、言語活動とその社会的・思想的背景を結びつけようとするCDAとFPDAの立場からの談話分析を援用している。また、対象としている女性活動家についての説明も行われる。さらに研究目的に関して、使用される言語的特性はどんなものか、書き手が自らをどのように位置づけているか、そして、彼女らの談話にどのようなジェンダーや宗教に関する談話が組み込まれているか、という三つの方法論的観点から明らかにしようとすることも述べている。

第3章～第5章では、データ分析が行われ、1) マレーシアにおけるジェンダーとイスラム原理主

義に関する談話の脱構築、2) 現行イスラム法（シャリア）への反論、3) イスラム教的な文脈における男女同権主義の主張、という三つのテーマが設定され、それに関連する記事を第2章で述べた三つの方法論的な観点に即して緻密に分析し、女性活動家たちが自分の立場を守りながらも相手を批判し男女同権主義的な主張を展開する言語的・談話的手段が詳細に明らかにしている。

第6章では、第3～5章の分析がまとめられ、また、第1章の研究の社会的背景と第3～5章のデータ分析とが照合されて、現在の政府による穏健的イスラム主義的国家運営とイスラム原理主義勢力との狭間で本論文において分析された女性活動家たちがどのような役割を果たしているかが論じられる。付録では、分析された新聞記事のリストなどが挙げられている。

審査会で最も評価されたのは、第3～5章における具体的な談話分析であった。また、研究の対象と方法の組み合わせが非常にユニークで、男女同権主義的談話分析への独創的な貢献とされた。一方、本論文が分析対象とする事例の選定に関する説明が不十分でリサーチ・クエスションの設定に唐突な印象が残ったことも指摘された。これに対して、第2章で議論した方法論的問題意識はよく練られており、問題の社会的背景と事例分析を説得的に結びつけている。

結論として、本論文は、論文提出者が自立して研究活動を行うに必要な高い研究能力と学識を備えていることを示すものである。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。